月刊イオ電子ブックレット○2014年11月号

在日スポーツマンの活躍 2002~2008年（中）

電子ブックレット
io Digital Books

月刊イオ電子ブックレット○2014年11月号

在日スポーツマンの活躍（中）2002~2008年

目次

		出典
3	高麗SC 全国大会初出場	2002年9月号26~27ｐ
5	大阪朝高・京都朝高 全国大会出場!	2004年1月号 20~21ｐ
7	大阪朝高ラグビー 花園初出場!	2004年2月号 14~17ｐ
11	選手権初出場の京都朝高	2004年2月号18~19ｐ
13	大阪朝高ラグビー部2年連続で「全国」へ	2005年1月号62~63ｐ
15	全国高校ラグビー大会 2年連続出場した大阪朝高	2005年2月号 62~65ｐ
19	復活!　洪昌守	2005年9月号65~67p
22	全国高校サッカー選手権大会 大阪朝高ベスト８	2006年2月号34~39p
28	洪昌守 初防衛	2006年4月号62~63ｐ
30	大阪朝高サッカー部「国立」への再挑戦	2007年1月号42~45p
34	高かった初戦の壁 大阪朝高サッカー部	2007年2月号61~63ｐ
37	神戸朝高卒業生 裵在樹選手 世界へ挑戦	2007年10月号60~61p
39	大阪朝高ラグビー部 三たび花園へ	2008年1月号42~43p
41	大阪朝高ラグビー部 花園で3度目の挑戦	2008年2月号42~45p
45	プライドをかけた朝大サッカー部の戦い	2008年7月号42~45p
48	世界の頂点に統一旗を掲げる	2008年8月号44~45p

io means the inheritance of national identity by Koreans of all generations in Japan.
在日同胞をネットワークする

▼ダウンロードは、電子ブックレットのホームページへ
www.io-web.net/store

月刊イオ

電子ブックレット io Digital Books

〒112-8603 東京都文京区白山4-33-14 朝鮮新報社 月刊イオ編集部／TEL 03(6820)0107(代)／FAX 03(3812)9572／Eメール：io@io-web.net

高麗SC 全国大会出場

20数年のときを超え、ついに晴れの舞台へ

日本スポーツマスターズ2002関東地区予選会で1位に輝く

文・千貴裕（朝鮮新報記者）

二十数年のときを超え、「幻の日本一」がついに日本の全国大会に出場する。去る七月二十日、山梨県富士吉田市にある北麓公園陸上競技場でおこなわれた日本サッカー協会主催の日本スポーツマスターズ2002サッカー競技（四十歳以上のシニア競技）関東大会に東京都代表で出場した高麗サッカークラブ（孔進会長）が見事一位の成績で全国大会出場の快挙を成し遂げた。大会には、関東地方の八都県代表チームが参加。八チームによる変則リーグ戦（一チーム二試合）方式で勝敗を競った試合で高麗は、第一試合、千葉県代表を一対〇（前半一対〇）、続く第二試合も群馬代表を三対〇（前半二対〇）で完勝し、念願の全国大会初出場の切符を手にした。日本スポーツマスターズ2002サッカー競技全国大会は、今秋、神奈川県藤沢市で開催される。

「幻の日本一」、ついにベールを脱ぐ

高麗SCは在日朝鮮蹴球団と東京朝高サッカー部OBを中心に、関東に在住する四十歳以上の同胞サッカー愛好者で作られたサッカークラブ。現在、メンバーの平均年齢は四十五歳。二十数年の伝統を持つ同クラブは、今まで古河市マスターズサッカー大会、波崎シニアカップ、マスターズサッカー御殿場カップなどのシニア大会で優勝。今年は世界マスターズ大会（十月、オーストラリア、メルボルン）出場権を手中にし、その強さをアピールしてきた。

しかし、選手たちには辛い過去がつきまとう。それは、多くの選手が一九七〇年代、在日サッカー全盛期だった朝高サッカー部で汗を流したメンバーで、当時から日本の教育法上「各種学校」扱いされていた朝高には高体連主

サッカーに燃える「シニア」の笑顔は今も昔も変わらない

催の公式戦に出場する機会は与えられなかった。それでも選手たちは、その年の全国高等学校サッカー選手権大会優勝高など、当時の日本の強豪校を次々と破り、日本のサッカー関係者から「幻の日本一」と呼ばれてきた。

その全国大会についてメンバーらは、「学生時代には考えることもなかった夢のまた夢の舞台」と口にする。

学生時代、「裏の舞台」でのみ活躍が許されたメンバーだが、二十数年の月日が流れた今でも、サッカーに対する情熱の灯火が心から消えることはなかった。東京・北区の三十五歳以上のリーグ戦に加盟し、地道に機会がくるのを待っていた。

そして、昨年、ついに門戸開放の道が開いた。日本サッカー協会は同年一月の理事会で同協会準加盟のチームにも公式戦出場の権利を与える決定を下した。

次の目標は全国大会優勝！

協会準加盟の高麗の選手たちにとって、昨年新設された日本スポーツマスターズは、初めての「公式戦」だった。しかし、東京都の予選会に勝ち、関東大会に進んだ選手たちは、全国出場を目前にし、惜しくも決勝で敗れた。

この一年間、選手たちには昨年の雪辱を晴らすための戦いが続いた。

金慶一（キムキョンイル）主将（四十八歳）は、「この一年、自分たちに何が足りないのかを真剣に論議してきた。今年は選手層を強化することで、仕事、ケガなどで主力が抜けても、レベルが落ちないチーム作りをしてきた。本当に今日は、メンバーみんなで勝ち取った団結の勝利です」と胸を張る。

また、今回の大事な試合で三得点し、チームの勝利に貢献した呉泰栄（オテヨン）監督兼任選手（四十八歳）は「あの時の敗北の悔しさを一年間忘れることはなかった。この一年間、毎朝、自主トレに励んできた。全国大会には、四十歳以上の在日同胞サッカー愛好家を代表するつもりで臨みたい」と語気を強めた。

学生時代、スタートラインに立つ資格さえ、目標を持つことさえ許されなかった全国大会。さまざまな複雑な思いが交差する晴れのフィールドに選手たちは立つ。

「〈幻の日本一〉と呼ばれた実力が本物だったことを証明する」（李在述（リジェスル）さん）

「われわれもウリハッキョでサッカーを習った。われわれの活躍を通じ、多くのウリハッキョの生徒らが自信をもってほしい」（孔進会長）

在日朝鮮人のスポーツ界をリードしてきたサッカー界にまた、新たな勲章が加わった。

胞社会に夢と希望と勇気を―

SOCCER

高・京都朝高、大会出場！

ての応援を！ ウリ朝高イギョラ！

周知のように大阪朝高ラグビー部と京都朝高サッカー部は、11月16日におこなわれた03年度全国高等学校ラグビーおよびサッカー選手権府大会でそれぞれ優勝、全国選手権へのキップを手中におさめた。大阪朝高は大阪府大会第1地区決勝戦で近畿大学付属高校を15－13で下し、一方、京都朝高は第82回全国高校選手権大会京都大会決勝戦で延長戦の末、桂高校を2－1で下し優勝を手にした。94年、朝鮮学校に対する全国大会への門戸開放後、サッカーは2度目の選手権出場、ラグビーは初出場となる。朝鮮学校生徒の快挙に沸き立つ同胞たち。全国大会でも朝高の気概を発揮し、力一杯たたかえるよう同胞たちの応援もキックオフ。

FOOT BALL

在日同

大阪朝

全国

全在日コリアンあ

大阪朝高ラグビー部
初戦：12月28日／12時30分キックオフ／大阪・花園第1グラウンド／対戦相手、富山県・砺波高校

京都朝高サッカー部
初戦：1月2日／12時10分キックオフ／埼玉スタジアム2002／対戦相手、埼玉県・武南高等学校

大阪朝高・ラグビー花園初出場

念願の「一勝」、全国制覇へ続く挑戦

超満員のスタンド、1万2000人の同胞に感動

第83回全国高校ラグビー大会（2003年12月27日～04年1月7日）に朝高史上初めて出場した大阪朝鮮高級学校（大阪府第1地区）は、12月28日の1回戦で砺波高校（石川県）に80―0の大差で圧勝。30日におこなわれた2回戦では昨年の高校公式戦で無敗を誘る正智深谷高校（埼玉県）と対戦し、24―40で惜しくも敗れたが、互角の試合を展開、念願の一勝を遂げ、花園に新たな歴史を刻んだ。試合会場となった東大阪市の花園第1ラグビー場には2回戦では大会記録となる約1万5000人の観客が詰め掛け、同胞の期待を胸に突き進む朝高選手たちに熱い声援を送っていた。

写真／文光善（朝鮮新報記者）
photographs by Mun Gwang Son

大阪朝高

場

近鉄花園ラグビー場
1 稲垣 9 貝淵
2 山崎 10 伊東
3 八田(哲) 11 柴田
4 大野 12 高島
5 根尾 13 石田
6 岡田 14 二口
7 吉田 15 宮崎
8 長崎
砺波 VS 大阪朝高
0 1st 40
0 2nd 0
0 40
RF 古賀善充
T G PG DG
1st
2nd
tsuji 辻調グループ校
1 チェ ヤンス 9 コウ ミンズ
2 クォン ヨンス 10 チョウヒョンチル
3 チョン キホン 11 アン ビョンス
4 キム チョルス 12 キム チョルファ
5 ハ ヨンギル 13 リ ヒョンジ
6 キム ヒソン 14 ア デジュ
7 チョウヒョンドク 15 キム キュボ
8 ムン チホン
tsuji 辻調グループ校

近鉄花園ラグビー
Kintetsu Hanazono Rugby Stadium

京都府代表として第82回全国高校サッカー選手権大会に出場した京都朝鮮高級学校サッカー部は2日、埼玉スタジアムで2年連続13回目の出場、優勝経験もある武南高校（埼玉）と対戦し（2回戦）、0―2で敗れた。

試合では前半早々、朝高が相手ゴールを何度となく脅かしたが、得点にはいたらず。選手のユニホームと同じ、赤いTシャツ、タオル、帽子、メガホンを持った同胞らで真っ赤に染まった応援席は、「一勝」「初戦突破」を願う熱い声援に包まれた。

選手権初出場の京都朝高

走りぬくサッカー見せた

トンポらでまっ赤に染まった応援席

写真／姜鐘錫（朝鮮新報記者）
photographs by Kang Jong Sok

ロスタイムに逆転のトライ

大阪朝高ラグビー部2年連続で「全国」へ

試合を決めた逆転トライを含む2トライの活躍を見せた夫選手。（写真は前半29分、朝高2つ目のトライ）

大阪朝鮮高級学校ラグビー部は、第84回全国高校ラグビー選手権大阪府予選第2地区決勝で関西創価高等学校と対戦した。試合は、逆転トライを奪い合う激しいシーソーゲームになった。

後半27分、相手の逆転トライで大阪朝高4点ビハインド。応援席は静まり返った。昨年の「奇跡」はペナルティゴールで演出できたが、今回はトライが絶対条件。それでも朝高選手たちの目はギラついていた。

「まだや！」。選手の口元は確かにそう動いた。昨年の奇跡を知る選手たちは、何度もこの状況を想定した練習を重ねてきた。「3分あれば逆転できる」。あとは体に染み込ませた「奇跡」を遂げるだけだった。

力強い突進を再三、繰り返してきたフォワード陣に触発され、バックス陣も流れるようなパスワークで攻め上がる。相手監督も舌を巻くほどの勝利への強い執念を見せる選手たちの姿に、応援団の声援も復活した。

ノーサイド直前ロスタイム、大阪朝高は中央ゴール前5メートルのラックから右サイドへ展開。右ウイングの夫太洲（プテジュ）選手（3年）が快足を飛ばして右隅に逆転トライ。試合を決めた。

「われわれにできることは同胞たちに力を与え、勇気づけること。そのためにチームが一つになって、最後までよく戦った」（金信男（キムシンナム）監督）

「トライした瞬間は頭が真っ白になった」（夫選手）。抱き合って喜ぶ選手たちが応援団のもとに駆けつける。「心臓が飛び出しそうだった」という応援団も、劇的な勝利に歓喜し、涙した。

父母後援会の安公栄（アンゴンヨン）会長は「選手と応援団が一つになった最高の試合。絶対勝ってくれると信じていた」と涙ながらに語った。

「ハナ、信頼、勝利」を合言葉にチームワークを強化し、一つになることをひたすら目指してきた。その唯一にして最大の武器が、土壇場で見事に発揮された。

「昨年、花園に置き忘れたものを取り戻す」（河勇吉（ハヨンギル）主将）、「全国大会ではもっと強い朝高ラグビーを見せたい」（鄭貴弘（チョンギホン）副主将）。喜びも束の間、すでに照準は全国大会に向かっていた。

チームの思いは一つ。「ひたむきで、地道で、精度の高いラグビーで全国制覇を目指す」（金監督）。

文：李泰鎬／写真：姜鐘錫
（ともに朝鮮新報記者）
text by Ri Te Ho
photographs by Kang Jong Sok

TRY!

朝高フォワード陣は終始、パワーで相手を圧倒した（写真上、朝高1つ目のトライ）

表彰式後の記念撮影。大阪朝高ラグビー部は「コミュニケーション合宿」などを通じてチームワーク強化に力を入れてきた（写真下）

全国大会出場の大阪朝高ラグビー部　激励金を募る

全国高校ラグビー選手権大阪府予選第2地区決勝で勝利し、2年連続で全国大会の出場権を獲得した大阪朝鮮高級学校ラグビー部。これと関連して、同校ではラグビー部応援実行委員会を結成。委員会は、同校ラグビー部が万全な状態で試合に臨めるようにと激励金を募っている。

【振込先】口座番号／ミレ信用組合　東大阪支店　（普）１１２８６３５
口座名／大阪朝高ラグビー部　全国大会出場応援実行委員会
曺在勲（チョウ・ジェフン）

ひたむきなラグビーで2回戦突破

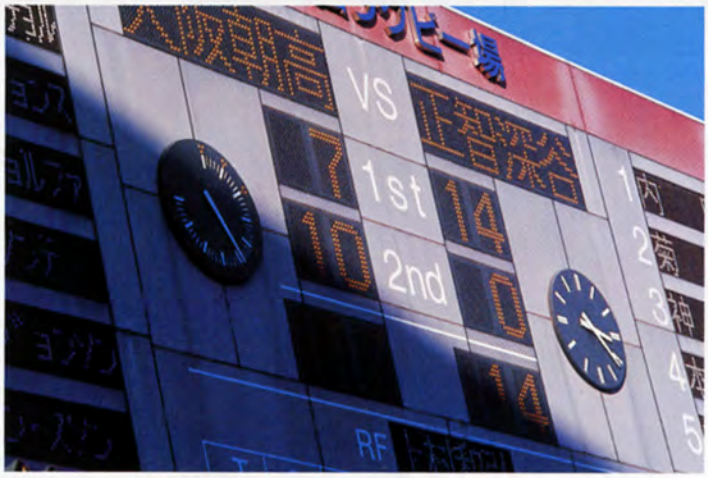
―夢は後輩に託す―

第84回全国高校ラグビー大会●2年連続出場した大阪朝高

東大阪市の近鉄花園ラグビー場で昨年12月27日に開幕した
第84回全国高校ラグビー大会に、
大阪朝鮮高級学校が2年連続で出場した。
「激戦区・大阪」を苦しみながらも勝ち抜いてきた実力を
「全国」の舞台でもいかんなく発揮し、
会場に詰めかけた同胞や日本人に爽やかな感動を与えてくれた。

文・写真：琴基徹 photographs & text by Kum Gi Chol

対正智深谷戦。昨年負けた相手だが、金監督は「まったく意識していない」と試合前語っていた。試合は前半から大阪朝高が深谷陣内に攻めこむ展開に。気迫で相手を圧倒していた。後半、トライを決めてついに逆転、時計の針は残り5分をさしていたが…（写真下）



大阪朝高の成績

1回戦
東海大翔洋高校（静岡県代表）
15−13
前半12−3／後半3−10

2回戦
若狭高校（福井県代表）
43−10
前半22−0／後半21−10

3回戦
正智深谷高校（埼玉県代表）
17−35
前半7−14／後半10−21

全国大会の厳しさ

「昨年、花園に忘れてきたものを取り戻す」――今年の目標を、金信男（キムシンナム）監督以下すべてのスタッフ、選手がこう語った。大阪府の代表として、「優勝」の言葉を口にしてもおかしくない実力を備えて大会に臨んだ。

金信男監督は闘いを前に次のように語った。「負傷し予選に出場できなかった選手も戻り、大会に照準を合わせ練習してきた。予選の時より戦力はアップしている。今年のチームはフォワード、バックスのバランスがとれたチーム。フォワード、バックスがひとつになって、縦からでも横からでも攻めて守れる」。そして、「自分たちのひたむきなラグビーを徹底してやりたい」と、チャレンジャーであることも強調した。

組み合わせが決まった時から、大きな山場が3回戦に来るのは予想された。勝ち進めば、シード校の正智深谷高校（埼玉県代表）と当たる可能性が高い。昨年、2回戦で負けた相手でもある。昨年以上の成績となる3回戦進出が第1の目標といえた。

しかし、大阪朝高は静岡県代表の東海大翔洋高校との1回戦（28日）、大苦戦してしまう。前半2つのトライでリードするが、東海大翔洋も2つのペナルティゴールで追いすがる。前後半と朝高は自陣に攻めこまれることが多く、後半17分にはついに逆転のトライとゴールを決め

ひたむきなラグビーで2回戦突破

―夢は後輩に託す―

堂々と開会式に臨む大阪朝高の選手たち（写真上）。対東海大翔洋戦。逆転を許した後、怒涛の攻めを見せる（写真上から2番目）。会場には保護者をはじめ多くの同胞が訪れ、選手たちの活躍に歓喜した（写真上から3番目）。対若狭戦（写真下、写真右）

られてしまう。12―13のまま試合はロスタイムに。朝高の最後の攻撃。プレーが中断した瞬間に試合終了という絶体絶命の状態だった。大阪朝高の執念の突進がついに相手の反則を誘う。ゴール中央15メートルの地点からスタンドオフ、趙顕哲（チョヒョンチョル）選手（3年）が慎重にペナルティゴールを決めると、その瞬間にノーサイドの笛が鳴った。

試合後、金監督は、「これが全国大会の厳しさ。最後は選手を信じていた。得点差でトライを取らなければならない場面、ペナルティゴールでもいい場面と、最後のワンプレイでいかに逆転するのか、状況に合わせて練習をしてきた」と語った。キャプテンの河勇吉（ハヨンギル）選手（3年）は、「最後は、継続、継続と声を掛け合ってプレーした」と振り返った。

30日の2回戦の相手は、福井県代表の若狭高校。朝高は前半を4つのトライで22―0と大きくリード。後半も3つのトライを重ね43―10と勝利した。

終了6分前に逆転するも

年が明けて元旦、3回戦の相手は予想通り正智深谷高校だった。初戦を89―5の横綱相撲で勝ちあがってきた。試合のポイントは、深谷の2人のトンガ人留学生、ナンバー8のエロネ選手と右ウイングのクリスチャン選手をいかに抑えるかという点にあった。「低いタックルで止めたい。ひたむきな15人のラグビーで目一杯チャレンジする」。金監督は、試合前の意気込みをこう語っていた。

その言葉通り、試合開始から朝高の選手たちは素晴らしい気迫を見せる。ボールを支配し相手陣内に攻めこむ。しかし、先制したのは深谷だった。前半17分、深谷ゴール前からエロネ選手が持ち出しクリスチャン選手にボールが渡ると、一気に朝高ゴール中央に跳びこんだ。前半27分にも深谷がトライを決め0―14。しかし、朝高も前半終了間際に右ウイングの

対正智深谷戦。ラインアウトからのボールの奪い合いに備える大阪朝高のフォワード陣

夫太洲（プテジュ）選手（3年）がトライを返し7―14で前半を終える。

後半に入ると、さらに朝高の猛攻が続く。19分、左ウイングの安柄修（アンビョンス）選手（3年）が、24分にはモールからキャプテンの河選手が左隅にトライ。ついに17―14と逆転する。湧きあがる応援団。残り5分。流れは完全に朝高にあった。しかし、深谷のキックオフ後のミスからすぐに再逆転のトライを決められてしまう。17―21。そこから緊張の糸が切れたのか、続けざまにトライを決められ結局、17―35で敗退、半分手中にあった勝利を逃してしまった。

ノーサイドの笛が鳴るや崩れ落ちる朝高選手たち。泣きながら戻ってくる選手に金監督は、「泣くな、胸を張れ！」と檄を飛ばした。

金監督は試合を振り返り、「終了5分前までシード校と対等に闘えたのは大きな誇り。大会の最後にひたむきなラグビーができたと思う。これは大きな宝物。また、同胞だけでなく日本の人たちも大きな応援を送ってくれた。ここには何の壁もない。今年の借りは来年また返しに来る」と語った。

深谷の坂本満監督は、「大阪朝高は素晴らしいチームだった。フォワードとバックスのバランスがいい。ドライビングモールは今大会で一番うまかった。予想通り苦しい試合だった」と振り返る。

「後悔はない。全員で攻めて守るひたむきなラグビーが今日はできたし、後輩に残すことができたと思う。その伝統を守り来年も花園に来てほしい」（趙顕哲選手）、「残り5分を守りきれなかったのは力の差が出たから。しかし、試合内容は来年につながるものだった。シード校を倒し優勝する、この目標は後輩が達成してくれる」（河勇吉選手）と、卒業する選手たちは、自分たちの夢を後輩たちに託した。

シード校相手に互角の戦いを見せた大阪朝高。しかし最後は力負けをしてしまう。敗戦後、観客席に向かいあいさつする選手たちに、応援に駆けつけた同胞らから大きな拍手が沸き起こった

1年ぶりに
チャンピオンベルト奪回・
川島選手に大差の判定勝

復活！洪昌守

WBC世界スーパーフライ級タイトルマッチ12回戦が
7月18日、大阪市中央体育館で行われ、
前王者で同級4位の洪昌守（ホンチャンス）選手（30歳、金沢ジム）が
王者の川嶋勝重選手（30歳、大橋ジム）を判定で破り、
見事王座に返り咲いた。
日本国内歴代3位タイの世界戦10勝目で、
同一世界王座奪回は日本で7人目となる。

【写真】試合終了後、奪回したチャンピオンベルトを手に関係者らと抱き合って喜ぶ洪昌守

文：金明昱（朝鮮新報記者）
text by Kim Myong Uk
写真：姜鐘錫（朝鮮新報記者）
photographs by Kang Jong Sok

洪昌守 復活！

一時は考えた引退――。
復帰を決意したのは「プライドを取り戻すため」

屈辱の1回TKO負けから385日。洪昌守の再起戦の相手は、昨年6月に王座を奪われた川島。誰もが川島有利と予想していた。しかし結果は、判定3―0が物語るように洪昌守の圧倒的勝利だった。

試合序盤からブランクを微塵も感じさせない試合運びで、得意のアウトボクシングを存分に発揮する洪昌守。スピードのある左ジャブと右ストレートで積極的に攻撃を仕掛けていく。突進してくる川島を俊敏なフットワークでかわすと、鋭いワンツーをクリーンヒットさせる。7回以降、川嶋は接近戦に持ち込み、左右のショートフックで活路を開こうとしたが、洪昌守は巧みなクリンチと素早い動きでパンチをかわし切った。12回、足をすべらせたところを川島の右フックでダウンを奪われたが、それまでのリードが大きかった。洪昌守の復活を見せつけた勝利だった。

1年前、9度目の防衛戦で川嶋に1回107秒でTKO負けという屈辱を味わった洪昌守は一時、引退を考えた。しかし、「このままでは一生悔いが残る。自分のプライドを取り戻すため」と復帰を決意した。そして、防衛を続けることに疲れてやる気が低下し、週3日しか練習しなかったことを死ぬほど悔やんだ。

この半年間、川島の突進に押し負けない体を作るため徹底した筋力トレーニングをこなした。筋肉がつくことによる減量苦やスピード減も覚悟のうえでの肉体改造だった。1年前に比べ、洪昌守の胸囲は5センチも増えていた。

パワーアップした肉体と持ち前のアウトボクシングが生んだ必然の勝利だったとも

言えよう。何よりも「自分のプライドのため」「必ず勝つ」という気合いが相手を打ち負かした。

リング上で約1年ぶりにチャンピオンベルトを掲げる姿に「チョッタ！　チャンス！」などの声援が送られ、会場に駆けつけた同胞、日本人らとともに勝利をかみしめた。「自分のリズムで最後まで戦うことができた。みんなの応援のおかげです」―洪昌守の甲高い声が久しぶりに会場に響いた。

会場には朝青大阪が準備した横断幕が掲げられ、青い朝鮮半島が描かれた「統一旗」を振って同胞、日本の若者らが一緒に声援を送っていた。

「とにかくこの日を待っていました」と話すのは高滋喜（コジャフィ）さん（34歳、会社員）。「最初見た時から絶対に勝つと思っていた。みんなに夢を与える姿ってやっぱり感動ですよ。今日の勝利した姿を見ると涙が出そうです」と興奮気味に語った。生野商工会で働く康賢大（カンヒョンデ）さん（21歳）は生での応援は初めてだと話しながら「これからもずっと世界チャンプであり続けてほしい」と願う。

大阪朝高ボクシング部の選手らも、会場でひときわ大きな声援を送っていた。インターハイへの出場が決まっていた朴善暉（パクソンギ）、尹成龍（ユンソンリョン）選手（ともに3年）は、「相手の攻撃を寄せつけないボクシングはさすがだと思った。会場に入ってくる洪選手を見ながら、必ず勝つというオーラが伝わってきた。インターハイへの励みになった」と口をそろえていた。

第84回 全国高校サッカー選手権大会

大阪朝高ベスト8

後輩たちに託した国立への夢 その涙は必ずこれからの糧になる

1994年にインターハイ、96年に全国高校サッカー選手権大会への門戸が朝鮮高級学校に開かれた。それから約10年。インハイ、選手権合わせてこれまで4度に及ぶ朝高サッカーの全国での挑戦は、1回戦の壁に跳ね返され続けてきた。第84回全国高校サッカー選手権大会―大阪朝鮮高級学校が、同胞たち待望の1勝を成し遂げた。そして彼らはベスト8まで突き進む。彼らが積み上げた一つひとつの勝利は、在日同胞の歴史の新たな1ページとなった。

「カーン」

ボールがゴールバーを叩く乾いた金属音がスタンドに鳴り響くと同時に、大阪朝鮮高級学校の選手たちは夕日がかる芝生の上に崩れ落ちた。彼らの「冬」に終わりを告げるホイッスルが無情にも吹き鳴らされた。

届かなかった国立

第84回全国高校サッカー選手権大会準々決勝・野洲戦は、手に汗握る好ゲームとなった。今大会、初優勝を飾った野洲は、テクニックとショートパスで相手を翻弄する「クリエイティブサッカー」、かたや大阪朝高は無尽蔵のスタミナと「朝高魂」で高い位置からプレスかける「パワーサッカー」。両極端にあるチームの試合は、序盤は互いに決定機をなかなか作れない。前半のシュート数も両チーム3本ずつと中盤での攻防が目立つ。

しかし前半終盤から流れは次第に大阪朝高へと向き始めていた。高い位置からのプレスが次第に野洲のミスを誘い始める。後半が開始しても大阪朝高のリズムで試合は展開されていく。後半15分だった。右サイドから切り崩し、あげられたボールに反応した趙栄志（チョヨンジ）が右足で野洲ゴールに突き刺した。

これまでの3試合無失点を誇る安定したディフェンスを誇る朝高。しかしその自信が少しの「緩み」を呼んだ。後半32分、野洲がそれまで押さえられていた大阪朝高ディフェンスをショートパスで切り裂いた。左サイドからつながれた流れるようなパスに、朝高ディフェンスは触れることができなかった。痛恨の同点弾を決められる。312分の無失点記録はついに途絶えた。

その後、互いに決定機をつかめぬまま、決着はPK戦へともつれ込んだ。同点に追いついた野洲の勢いに大阪朝高は冷静さを欠いたのかもしれない。心理戦と運が大きくものをいうPK戦、大阪朝高は4人のキッカーのうちたった1人しか決めることができなかった。連戦、緊張、そして試合中走り続けた朝高選手たちのスタミナはすでに限界に達していた。大阪朝高の快進撃は幕を下ろした。

「下向くな。胸張ろうや」。とめどなく溢れる涙を拭きながら、安泰成（アンテソン）主将は部員たちに叫び続けた。4122校のベスト8。「国立への夢」はついに叶えることはできなかったが、朝鮮高校として全国での歴史的初勝利、そして220の大阪府代表校として21年ぶりとなるベスト8進出は、同胞たちに、そして日本の高校サッカーファンにも大きな夢と感動を与えた。破竹の勢いで強豪高を撃破していったその戦いは決してまぐれや勢いだけでは

文、写真：鄭茂憲
text & photogragh by Chong Mu Hon

対西目

「全国」というプレッシャーを弾き飛ばした趙栄志のビューティフルゴールが、大阪朝高のベスト8への扉を開いた

なかった。

12月31日、初戦となった西目戦。大阪朝高は緊張からかミスが目立つ。その嫌な流れを吹き飛ばしたのが趙栄志のゴールだった。後半開始1分、後方からのヘディングに右足で合わせた。「イメージ通りだった」と試合後に振り返ったボールの軌道は、美しい弧を描いて西目ゴールへと吸い込まれた。喚起に沸く大阪朝高応援スタンド。趙栄志は胸の番号に手を押し当て、喜びを爆発させた。歴史的1勝、その後の快進撃はこのシュートから始まった。

2回戦の岐阜工戦は雨の降るなか行われた。スリッピーなピッチコンディションで大阪朝高のプレスサッカーは、元来以上の輝きを見せる。中盤でのボールコントロールを完全に封じられた岐阜工になすすべはなかった。前半26分に梁泰雄（リャンテウン）、31分に梁正成（リャンジョンソン）がたて続けにゴールを奪うと、後半に入ってからもその勢いは衰えず、後半16分にスーパーサブ・朴治宣（パクチソン）が駄目押しとなる豪快なヘディングシュートを叩き込んだ。

1月3日の対国見戦は、大阪朝高サッカーの強さを日本中に確信させた試合となった。選手権6度の優勝を誇る高校サッカーの名門・国見。「国見有利」が関係者たちの絶対的な試合予想だった。強風が吹き荒れるなか試合開始のホイッスルは鳴らされた。前半、大阪朝高は風下のエンド。ディフェンスラインから前線へ蹴りだされるハイボールが、風ですべて自陣に跳ね返される。一方、国見はボールを風に乗せながら、ロングフィードからサイドアタックを幾度となく仕掛ける。前半だけで国見が放ったシュート数は8本、対する朝高は2本。その劣勢さをうかがわせる。しかし安泰成主将を中心としたディフェンスの体を張ったプレーとゴールキーパー・朴寛明（パクファンミョン）の再三のファインセーブで前半を無失点に切り抜けた。

後半、風上に立った大阪朝高がペースをつかむ。朝高スタンドが歓喜に包まれたのは後半33分だった。朴治宣がこの日もスーパープレーで魅せた。右サイドから国見ディフェンス陣を巧みなドリブルで抜き去ると走りこんできた梁正成に合わせる。

第84回全国高校サッカー選手権大会 大阪朝鮮高級学校戦績

12月31日
秋田県立西目高等学校
1－0
得点者：趙栄志　41分
柏の葉公園総合競技場

1月2日
岐阜県立岐阜工業高等学校
3－0
得点者：梁泰雄　26分、梁正成　31分、朴治宣　66分
市原臨海競技場

1月3日
長崎県立国見高等学校
1－0
得点者：梁泰雄　73分
市原臨海競技場

1月5日
滋賀県立野洲高等学校
1－1　PK（1－3）
得点者：趙栄志　55分、瀧川陽（野洲、72分）
市原臨海競技場

大阪朝高の「パワーサッカー」を見せ付けた岐阜工戦。朝高は14本ものシュート数で岐阜工を圧倒した

岐阜工

野洲戦を終えて

comment

康敏植監督

「後半に1点入れてから安心感ができ、ちょっとした隙をつかれて失点してしまった。追いつかれたあとは得点する自信はあったが、そう簡単には取れないもの。試合前は今までどおりやってきたことをやろうと言った。自分たちのサッカーは十分に発揮できた。連戦の疲れがあったことも確かだ。一番の収穫は朝高がここまで来ることができるんだということを、日本の方々に証明できたこと。また、大阪代表のレベルが高いんだということを証明できた。勝負は時の運。実力では負けていなかった。監督としていい采配ができればよかったし、経験不足だと感じている。なによりも選手たちが100%以上の力を発揮してくれた。来年こそ『国立』の舞台に立つ。選手たちと応援してくれた多くの同胞たちに心から感謝したい」

梁正成のシュートを相手キーパーがはじいたところに梁泰雄がつめ、決勝ゴールがネットを揺らした。

激闘を制した大阪朝高選手の見据える先は、はっきり「国立」へと向けられていた。だが国立への道は容易ではなかった。

後輩に託した夢

準々決勝・野洲戦終了後、大阪朝高選手はあたりはばかることなく泣き続けた。国見、野洲戦とファインセーブを連発したGK朴寛明は、ペナルティエリア付近で泣き崩れ、動くことができなかった。PKの最初のキッカーとして失敗、自責の念が彼を押しつぶした。安泰成主将は朴に駆け寄り彼の肩を強く抱きかかえた。

試合後のロッカールーム。安は震える声で、大阪朝高のみんなとサッカーをすることができて幸せだったとメンバーに語った。「来年はインターハイも大阪で開かれるし、今日の悔しさを胸に、来年は必ず国立に行ってほしい」と後輩たちに望みを託した。

そんな3年生の想いを胸に、1回戦、準々決勝と得点を決めた2年の趙栄志は涙を浮かべながらかすれ声で語る。「ベスト8は胸張れる結果だけど、決して満足はしていない」。来年は国立という明確な目標が生まれた。「来年は自分がチームを引っ張って絶対に国立に行ってみせる」。小さなエース趙は、そうかたく誓った。

そして安主将は静かに一人席を立ち、府予選からこの日まで大阪朝高ベンチに掲げられていた千羽鶴を半分手に持って、野洲のロッカールームへと向かった。野洲

国見ディフェンダー陣を翻弄させた朴治宣のドリブル。この右サイドからの切り込みが歓喜のゴールを生んだ

国見 対

全国高校サッカー選手権を6度も制した「王者」国見を撃破し、朝高イレブンは天に両手をかざして勝利をかみしめた

イレブンに千羽鶴を手渡すために。この千羽鶴には、今は亡き安の弟への想いが込められていた。昨年5月、中大阪朝鮮中級学校に通っていた安の弟・泰栄くんが白血病でこの世を去った。千羽鶴は、回復を祈って泰栄くんに渡されたものと大阪府大会で朝高に敗れた日本の高校から送られたものだった。自分たちの分まで—安は涙ながらに千羽鶴を野洲イレブンに手渡した。残りの半分は、来年国立を目指す高1の次男・泰潤のために残し、自分が果たせなかった夢を託した。

ベスト8進出という快挙に、安は最後に「これで弟に胸張れますね」と笑顔で話した。

大阪朝高の今年の「冬」は終わった。しかし、その戦いに決して終わりはない。この日の涙は必ずこれからの糧になる。試合終了のホイッスルは、新たな戦いへの始まりへの笛となった。

◇　◇

1月9日の決勝後発表された大会優秀選手に、安泰成、趙栄志が選ばれた。

野洲 対

comment

今大会を制覇した野洲の高速ドリブルを止め続けた大阪朝高だったが、一瞬の気の緩みが敗因となった。しかしベスト8という快挙に、朝高スタンドからは拍手と声援がやむことはなかった

準々決勝・野洲戦のスタンドでは同胞Jリーガー・安英学（アンヨンハク）（名古屋グランパスエイト）、梁勇基（リャンヨンギ）（ベガルタ仙台）選手が大阪朝高イレブンの激闘を見守っていた。安選手は「歴史的1勝にはじまりベスト8までの快進撃を見て、在日同胞みんなが喜んで熱狂した。民族学校でもここまでできるんだということを示した大会だったと思う。来年からは、全国の朝高が、大阪朝高が成し遂げたベスト8を目指して、そしてそれを越えられるようにがんばってくれることを願っている」と話した。

また朝高サッカー部が初めて全国の舞台に立った、99年のインターハイに大阪朝高のゲームメーカーとして出場した梁選手は「自分たちが全国で勝てなかった分を後輩たちが勝ってくれてうれしい。ベスト8という記録は、これからの朝高サッカーの大きなステップアップになったと思う。今日負けた悔しさは、ピッチに立っている選手もスタンドで応援している選手も身にしみて感じているだろう。その悔しさを忘れずに、大阪朝高が大阪代表として毎年出られるようにこれからも日々練習に励んでほしい」とエールを送った。

1回戦からスタンドで応援し続けた安泰成主将のオモニ・文俊恵（ムンチョネ）さんは野洲戦終了後、国立に行けなかったのは悔しいが、子どもたちが夢を与えてくれたと話した。そして「今日までの貴重な経験を生かして、その時その時を大切にして人生を歩んでもらいたい」。朴治宣・帝宣（チェソン）選手のオモニ・金順花（キムスナ）さんは「2人ともよくがんばった」と声を詰まらせながら、来年高3になる帝宣選手が必ずまた全国の舞台に出場してくれると信じ、変わらぬ声援を送りたいと語った。梁泰雄選手のア

大阪朝鮮高級学校 メンバー表

1	GK	高仁志	3年
2	DF	朴帝宣	2年
3	DF	沈賢治	3年
4	DF	**安泰成**	3年（主将）
5	MF	金祐士	3年
6	MF	金泰弘	2年
7	MF	李明奎	3年
8	MF	金大龍	3年
9	FW	朴治宣	3年
10	FW	金元気	3年
11	MF	金英龍	3年
12	GK	朴寛明	2年
13	DF	金俊和	2年
14	MF	梁泰雄	3年
15	DF	姜晟哲	1年
16	DF	玄泰秀	3年
17	MF	全泰勝	3年
18	MF	趙尚熙	2年
19	MF	梁正成	3年
20	MF	白伸皓	1年
21	FW	韓創傑	2年
22	DF	宋昌秀	2年
23	MF	金政秀	3年
24	FW	趙栄志	2年
25	MF	朴誠衍	3年

ベンチに掲げられ続けた千羽鶴（写真左）。弟の分まで戦いたいという安泰成主将（写真右）の想いが詰まっていた

夢と感動を与えてくれた大阪朝高イレブン

歓喜に沸き、涙に暮れた朝高応援スタンドの声

ボジ・梁基千（リャンギチョン）さんは、子どもたちに「4つの感動をもらった」と語り、選手らが同胞の中で「英雄」になったと息子の活躍に感慨深げだった。

また歴史的1勝となった1回戦・西目戦終了後、大阪朝鮮学園の蔡成泰（チェソンテ）理事長は「歴史的勝利だ。民族教育の新しい1ページが（一昨年、昨年と全国高校ラグビー選手権で勝利した）ラグビー部に続き、開けた」と喜んだ。1戦目に決勝点を入れた趙栄志選手のオモニ・金明子（キムミョンジャ）さんは「感無量で放心状態。言葉にならない。次も勝って同胞たちに喜びを与えてほしい」と感動していた。

そして大阪朝高の兪基奉（ユギボン）校長は国見戦終了後、全国大会での3勝、ベスト8進出を目の当たりにして「感無量。次も必ず勝ちたい」と「4勝目」への意欲を見せていた。

大阪府予選決勝で朝高に敗れた清風高校サッカー部の佐伯栄太さんは大阪から駆けつけ、1回戦から朝高応援スタンドに座り応援し続けた。それは自分たちを負かした確かな実力を生で見たかったからだ。「自分たちの分までがんばってほしい」と、2回戦・岐阜工戦後に語った。そして3回戦の国見戦の劇的勝利を見ては「うれしい、うらやましい。次も勝って国立の舞台に立ってほしい」と願っていた。

敗戦後、スタンドに向けてあいさつをする大阪朝高。国立へのキップをつかめず流した悔し涙の先には、はっきりと新たな目標が見えていた

卓抜したスピードと相手との絶妙な間合いが、通産9度の防衛を可能にした。ナバーロは「洪昌守ワールド」のリング上で、翻弄されるだけだった

洪昌守 初防衛

歴代3位 通算9度目の王座防衛

王座返上は先送り

文・金明昱（朝鮮新報記者）
text by Kim Myong Uk
写真・姜鐘錫（朝鮮新報記者）
text by Kang Jong Sok

昨年の王座奪還後の初防衛に成功し、ベルトを掲げる洪昌守。会場からは、今回も同胞応援団の「イギョラ、イギョラ、ホンチャンス」の大声援が響き渡った

WBC世界スーパーフライ級タイトルマッチ

「ラストファイト」と銘打ったボクシングの世界戦が2月27日、大阪市中央体育館であった。WBC世界スーパーフライ級王者の洪昌守選手（31＝金沢）は、同級1位のホセ・ナバーロ選手（24＝米国）を3―0の判定で下して、昨年奪回した王座の初防衛に成功。昨年7月に川嶋勝重選手（大橋）からタイトルを取り戻した洪選手は、歴代3位の通算9度目の王座防衛を果たした。

「ラストファイト」と以前から噂されていたことで注目を集めた一戦。試合は得意のアウトボクシングで相手を追いやった洪選手の快勝だった。序盤から軽いフットワークでナバーロを翻ろう。左ジャブで相手との距離を保ちながら右ストレートを的確にヒットさせ、主導権を握った。1Rにはナバーロの右目上を出血させ、2R以降は打って下がる「洪昌守ワールド」に引き込んだ。12Rには、フルスイングで振りぬいた右がナバーロの顔面をとらえた。ロープへよろめき、ひざがつきそうなほど折れた。他の追随を許さないスピードと絶妙の距離感覚、目の肥えたファンにこそ愛される、ここ10年あまりで傑出した名王者のボクシングの強さは確かなものだった。

しかし、後半はスタミナ切れからかクリンチも多く、右ストレートにはいつものような切れがない。「打ってクリンチの連続で試合内容は面白くないかも知れないけど、今の自分にはあれしかなかった」と漏らす洪選手。そして、右に切れがないのは2週間前、大阪市内で遭遇した交通事故の影響だった。バイクを運転中、追突されて肩から足首まで右半身を負傷。腕は肩より上に上がらない。その不安とも格闘しながら2週間を治療に費やした。減量にも苦しみリミットに達したのは試合前日の午前3時だった。

それらの苦労を乗り越えての勝利は格別なものだった。リング上でのインタビューで、「スーパーフライ級の王者は卒業します。どういう道を歩くかはまだ決まっていないが、ボクシングで培った根性を生かしてこれからの人生をがんばりたい」と王座返上を言明した。

しかし、一夜明けての会見では様子が違った。洪選手は緊張した面持ちで切り出した。

「気持ちとしては引退を考えているが、まだ自分の中でしっかりとした結論は出ていない。今のところは2、3カ月休んで会長やいろいろな人と話し合ってゆっくり決めたい。引退なら自分の可能性をどんどん探していろいろなことに挑戦したいと思っている」と前日に表明した王座返上を含むすべての結論を先送りにした。

金沢英雄会長は、「あわてて結論を出さなくていい。時間をかけて話し合って考えればいい。まだまだボクサーとして落ち目の段階には来ていない」とのべた。「1階級下に亀田興毅、上にはWBC世界バンタム級王者・長谷川穂積などがいる。みんながみたい試合をするのも手だ」とジム側はビッグマッチを提案することで慰留する考えだ。

現役続行か引退か。「在日の星」として同胞たちに力を与えてきた洪選手の闘志は、再び燃え上がるのだろうか。「統一旗」を振り「イギョラ、ホンチャンス」といつも応援する同胞応援団も「正直引退してほしくない」と切に願う。今後の動向を見守りたい。

洪昌守は左ジャブで距離を保ちながら右ストレートをヒットさせ、試合の主導権を握った（写真上）／一夜明けての会見で、王座返上を先送りした洪昌守。「洪昌守ワールド」をまた見ることはできるのか

大阪朝高サッカー部「国立」への再挑戦

第85回全国高校サッカー選手権大会・大阪大会を制した大阪朝鮮高級学校サッカー部が、2年連続3回目の冬の選手権出場の切符を手にした。昨年のベスト8を越え、「国立」を目指す。また第86回全国高校ラグビー大会（花園）出場をかけて、決勝へと駒を進めた東京朝鮮中高級学校と大阪朝高ラグビー部は、それぞれ惜敗し、来年の雪辱を誓った。

文：金明昱／写真：文光善・盧琴順（朝鮮新報）

スリッピーなピッチ上で大阪朝高の強さが際だった決勝戦

（大阪朝高：白×赤ジャージ）

【大阪サッカー部】原点への回帰が実を結ぶ

第85回全国高校サッカー選手権大会・大阪大会の決勝戦が11月11日、万博記念競技場で行われ、大阪朝高が大阪桐蔭を2―1で下し2年連続3度目の全国大会出場を決めた。昨年に続き（全国選手権で国見を破って8強入り）223校の頂点に立った大阪朝高。朝高の代表として同胞はむろん、地元大阪の期待も一身に背負って府代表校として全国大会に出場すると意気込む。全国大会でチームが見すえるのは昨年、目前にして果たせなかったベスト4の「国立」の舞台だ。

昨年に続く2年連続の決勝戦。雨が降り注ぐ中、プレッシャーを一番強く感じていたのは、ほかならぬ監督と選手たちだった。

康敏植監督（36歳）は試合前の取材で「原点」という言葉をしきりに繰り返した。「原点に戻る」―これが今回のチームの一つのキーポイントだった。チームは昨年の全国選手権の活躍で一気に注目を浴びた。国見を倒した話題が先行し、マスコミも連日殺到した。

一気に目の前がまぶしくなった。それから低迷が続いた。新人戦、インターハイ予選でもベスト8止まり。在日朝鮮学生中央体育大会のサッカー競技でも愛知朝高に敗れた。大会3週間前には滋賀の草津東に0―5で敗北。こうした敗戦を教訓にして、原点に戻ってチームを立て直すことを優先してきた。

「兵庫の滝川第2との試合も1―2で敗れたが、泥臭さはしっかり発揮されていた。今まできれいなサッカーをしすぎていた。フィジカルを強化し、精神面、泥臭さをもっと出していこうと。自分たちのサッカーがなんなのかを何度も問いただした」

選手権出場に照準を合わせ、そして決勝の地にたどりついた。

決勝戦。序盤からチーム全体が前線からプレスをかけてボールを果敢に奪う姿が目についた。走り続けても落ちないスタミナもあった。その効果的なプレスによって前半早々からボールを支配する。そして前半16分、右サイドで得た直接フリーキック（FK）を朴帝宣選手（3年）が左足で振りぬいた。

「相手に当たっても入るようなボールを蹴った」。ボールは弧を描いてキーパーの頭上を越え、左隅に突き刺さった。前半32分にはセンターサークルの左手前で得たFKをまたも朴帝宣選手が得意の左足でゴール前へ蹴り上げた。絶妙のクロスがゴール前に上がると右サイドから走りこんできた趙尚熙選手（3年）が合

「花園」への想い届かず

東京／大阪朝高ラグビー部

2年連続「全国」へ
大阪朝高サッカー部

（東京朝高：青ジャージ）

わせて決めた。前半のスコアを2―0とし後半へ。

後半は互いに決定機を決められないまま時間が過ぎていった。そしてロスタイム、大阪桐蔭に右コーナーキックからヘディングで決められたが、そのまま試合終了のホイッスルが競技場に響き渡った。

康監督の目には涙が浮かんでいた。1年間、結果を出さなくてはいけないプレッシャーの中で戦い、一つ肩の荷がおりた瞬間だったのかもしれない。

「2年連続でこの舞台に立たせてくれた選手たちを本当にほめてやりたい。大阪の代表として恥じない試合をしたい。去年のベスト8を越えて『国立』を目指したい」。チームを率いてきた金俊和主将は、「みんなで勝ち取った勝利。去年の実績から正直プレッシャーもあった。でも自分たちがやってきたサッカーをすれば勝てる自信があった。全国大会では一つひとつ勝っていくことを心がけたい。そこから『国立』が見えてくる」と気を引き締めた。

【東京ラグビー部】残り1分に泣いた

第86回全国高校ラグビー大会・東京都予選（第2地区）の決勝戦が11月19日、秩父宮ラグビー場で行われ、東京朝高は東京高校に6―8で敗れ、全国大会出場を逃した。東京朝高は2000年の第80回大会の都予選決勝でも東京高校に敗れている。

申鉉秀監督（41歳）は、「ロースコアの接戦だったが、ここぞという勝負どころで勝たないと全国大会へは行けない。去年は準決勝、今年は決勝へ進んだ。来年こそは『花園』へ行けるよう素人集団を全国レベルへとしっかり引き揚げていきたい」と語った。

6年前、「全国」への挑戦が始まって7年目に初の都予選決勝の舞台に立った東京朝高。その時の相手も東京高校だった。同年に一度勝っていた相手だったが、実力を発揮できないまま7―13で惜敗した。「次こそは」と雪辱を誓ったが、なかなか日の目を見ることはなかった。

それから歳月が経ち、徐々に実力を備え始めた。申監督の1人体制だった部に、2人の専属コーチが新たに加わった。東京朝高ラグビー部OBで同校教員の呉昇哲コーチ（28歳）と大阪朝高ラグビー部出身で同校教員の邵基学コーチ（25歳）のフォワード、バックスへの徹底した指導によりチームにまとまりが見え始めた。そして昨年、都予選準決勝で国学院久我山に僅差で敗れたものの、全国レベルに近づいているラグビー部の実力に関係者らが注目し始めた。迎えた3月の第7回全国高校選抜大会。実力が正当に評価され「チャレンジ枠」に選出されるまでにもなった。全国の強豪との経験が東京朝高の実力を大きく押し上げていった。

夏の在日朝鮮学生中央体育大会決勝戦では、大阪朝高を破り23年ぶりに優勝、士気が大きく高まった。チームを引っ張る文炯駿主将（3年）が兵庫国体で都代表選手として選出された。ここでの経験がまた一つ、チームを大きく躍進させる要因となった。東京朝高の都予選決勝進出は確実視されていた。期待を裏切らない、堅実なラグビーで予想通りに第2地区決勝の舞台に立った。

「リベンジ」。ただそれは申監督の心の中での話だ。今のチームは昔とは違う。「6年前の話は選手たちに特別したことはない。今のチームには今の色がある。お前たちの時代なんだ、目の前の相手に集中しろと言った」。

戦前予想は互角。接戦のロースコアで勝負がつくと予想されたが、それが的中することになる。雨が降り注ぐ中、先輩たちが果たせなかった夢を背負い、東京朝高史上初の「花園」出場を賭けた試合が始まった。前半開始から3分、東京朝高は相手の反則から得た35メートルのP

Gを15番の徐永徳選手（3年）が左足で決めて先制した。東京朝高はその後、幾度となくモール攻撃で前に進むも、相手の固いディフェンスをなかなか突き破れない。逆に前半15分、東京朝高のゴール前10メートルの右ラインアウトから東京高校にモールで押し込まれトライを奪われた。前半3―5。

後半は互いに一進一退の攻防をくり返しながら得点チャンスをうかがった。そして後半16分、東京朝高がまたもや35メートルのPGから徐選手が決めて6―5で逆転に成功した。試合終了まで残り14分。しかしここから東京高校の猛攻が始まった。東京朝高のゴール前、5～10メートル地点での攻防戦は終了5分前になっても続いた。押しては押し返される展開。ここで1トライでも奪われれば、敗れるのは誰が見ても明らかだ。

東京朝高スタンドが勝利を確信し始めた終了1分前。悪夢のような光景が目の前に広がった。東京朝高の反則で相手にPGを与えてしまった。距離22メートル。蹴り上げられたボールは弧を描いてきれいに東京朝高ゴールに吸い込まれた。6―8。ロスタイム1分。逆転するにはあまりにも時間が短かった。ノーサイドは無情にも告げられた。

「最後までしっかり。顔を上げろ」。申監督の声が選手の声に届く。それでも選手たちは顔をあげられなかった。申監督は泣き止まない3年生ら一人ひとりと握手し、「みんなよくがんばった。これが勝負の世界。どこに行ってもこの経験をしっかり胸に刻んで生きてほしい」と声をかけた。

文主将は「敗れたのは悔しいけれど、全力をつくして後悔のないラグビーができてよかった。敗れたのは最後の最後で詰めがあまかったから。来年、後輩たちには笑ってもらいたい」と語った。

勝利の女神は東京朝高にほほ笑まなかった。しかし、「花園」初出場の切符をつかむ日がそう遠くないことを確信させてくれた決勝戦だった。

上：優勝を喜ぶ大阪朝高サッカー部
下：東京・大阪朝高ラグビー部は涙の中、後輩に自分たちの夢を託した

多くの感動を与えた朝高生のプレー

【大阪ラグビー部】高校最強チームに挑む

第86回全国高校ラグビーの大阪府予選・第2地区の決勝戦（11月12日、近鉄花園ラグビー場第1グラウンド）で、大阪朝鮮高級学校ラグビー部は、昨年に引き続いて決勝の舞台でまたも東海大仰星に5―19で敗れ、3度目の「花園」出場への夢を断たれた。「一つ、信頼、勝利」をスローガンに、来年こそ「花園」の舞台に立つことを誓う。

今年の東海大仰星は強い。金信男監督も「高校生レベルでは最強のチームだろう」と分析する。「仰星史上最強」―そう呼び名がつくほど高校生レベルでは敵なし。今年の公式戦は無敗、春の全国選抜も制している。練習試合も大学生とやるほどだ。体格差、実力ともに相手に分があるのは誰が見ても明らかだった。しかし、試合はやってみないと何が起こるかわからない。

全国一の激戦地区の大阪で、ラグビー未経験者の素人集団を全国レベルにまで押し上げていく大阪朝高の伝統ラグビー。「無から有、不可能を可能に」「いつでもチャレンジャー」の気持ちを忘れずに試合に臨んでいると金監督は語る。

試合開始とともに強力な東海大仰星のFW陣が攻めてくる。仰星はラインアウトからのモール攻撃でトライを狙う。反面、大阪朝高は粘り強く、低いタックルからのディフェンスで得点を許さない。朝高陣内での攻防戦が続く中、仰星が前半12分に10メートル右中間ラックから左へつないでトライ、ゴールを成功させた。そのまま前半を0―7で折り返した。善戦する大阪朝高に一筋の光りが見えてきた。「一生の中でのたった30分や。骨を

折ってもいい。それぐらいの気持ちで最後まで走れ」と金監督の檄が飛んだ。

後半戦。大阪朝高は好ディフェンスから隙をついて攻撃に転じるも、なかなか前に進めない。額から血を流す大阪朝高の選手、倒れる選手も続出するほど両者は激しくぶつかりあった。そんな中、大阪朝高は後半に一瞬の隙をつかれ、東海大仰星にバックスの好走から2トライ（1ゴール）を奪われた。

試合終了間際の後半30分、大阪朝高も右中間ラックから左へ展開し、11番の金聊彦選手（3年）が1トライを返して一矢を報いたが、ここでノーサイドのホイッスル。5―19で敗れたものの、大会関係者らは「（東海大仰星を相手に）これだけ善戦するチームは、全国大会でもそうないだろう」と話していた。

金監督は、選手たちを一人ひとりねぎらった。そして「みんな気持ちがしっかり入っていたし、よくがんばった。全国に行ってもこれだけ善戦できるチームはない」と自負する。

一方、東海大仰星の土井崇司監督は、「シンプルの中にも基本に忠実。気迫もあふれていて非常にいいチーム」と朝高の印象を語った。

チームを率いてきた鄭圭哲主将（3年）は、「負けたのは悔いが残るけど、自分たちがやってきたことをしっかりできた。チーム全体、とくに3年生の22人が一つになってここまで来られたことを誇りに思う」とすがすがしい表情を見せた。

2年生ながら唯一スタメンで出場した高健二選手は、「今日の決勝で朝高の底力を見せることができたと思う。気持ちで負けずに、泥臭さをもっと出していけばどんな相手にも勝つことができる。先輩たちが果たせなかった借りは来年、必ず返す」と雪辱に燃えていた。

「無から有」を生む大阪朝高ラグビー部の「花園」へのさらなる挑戦は続く。

大阪朝高サッカー部にご声援を！

第85回全国高校サッカー選手権大会
大阪朝高　1回戦試合

VS桐光学園（神奈川）
12/31（日）pm12:10　三ツ沢球技場（横浜市）

大阪朝高サッカー部
「応援賛助金」のお願い

大阪朝鮮高級学校サッカー部が2年連続3度目の「全国高校サッカー選手権」出場を果たしました。「民族教育」が育んだ選手たちが「全国の舞台」で堂々と戦う姿が同胞たちに大きな力を与え励みとなることを願い、みんなの「夢」をみんなの「力」で大きく育んでいくべく下記により「応援賛助金」を募ることにしました。積極的にご協力いただけることを心よりお願い申し上げます。（第85回全国高校サッカー選手権大阪朝高応援実行委員会）

●「応援賛助金」納付方法●

①「応援賛助金封筒」を学校、サッカー部関係者に手渡し
②「応援賛助金口座」への振込。振込先は下記

ミレ信用組合　東大阪支店
（普）1132072　サッカー応援会　曺在勲

「伝説」を「伝統」へ

大阪朝高サッカー部　姜敏植監督に聞く

去年のチームに比べて攻撃のバリエーションが増え、バランスの取れたチームに成長した。大阪府予選では、5試合で20点と得点が多かったが、2失点している。全国で勝ちあがるためには、守備力を強化していかなければいけないと考えている。

春の新人戦、夏のインターハイ予選で、いずれもベスト8で敗れてしまった。しかしその負けにより、チャレンジャーとして選手権予選に臨めた。先の2大会では、本来の朝高サッカーでもある「泥臭さ」を忘れ、きれいなサッカーをしていたことが敗戦の要因だった。そのことを選手たちも気づき、再出発することができた。今は納得のいくチームになった。

選手権で、去年のリベンジという意識はない。いつもの朝高のサッカーをするだけ。目標は「国立」だ。自信もある。

去年のチームで「伝説」を作った。だから今年はそれを「伝統」に変えていきたい。

高かった初戦の壁

2年連続出場の「伝統」

文・写真：鄭茂憲　text & photographs by Chong Mu Hon

第85回全国高校サッカー選手権大会の1回戦、大阪朝鮮高級学校（大阪府代表、2年連続3回目）vs桐光学園高校（神奈川県代表、10年ぶり4回目）戦が12月31日、三ツ沢球技場（神奈川県横浜市）で行われ、大阪朝高は惜しくも0-1で敗れた。前回大会のベスト8を越えて、初の「国立」（ベスト4）を目指したチャレンジは、初戦という大きな壁の前に跳ね返された。

「肩書き」というプレッシャー

試合は、大阪朝高、桐光学園ともに、互いにシュートチャンスをなかなか作れない。膠着状態が続いた前半戦を終えて、大阪朝高関係者が「動きが鈍い」とボソリと口にした。1万3000人が三ツ沢球技場を埋めたが、大阪朝高応援団の約3000人を除いたほとんどすべての観客は地元の桐光サイド。アウェー状態の会場は重たいプレッシャーとして大阪朝高イレブンにのしかかる。

そして、もう一つのプレッシャー。それは前回大会ベスト8という「肩書き」だった。前回大会のように「ミラクルチーム・大阪朝高」という、捨てるものがないチャレンジャー精神だけで、今大会には臨めなかった。口にはしなくても、過度の期待が間違いなく選手たちの両肩に掛けられていた。

球ぎわの強さを発揮しながら何とかかみかけた流れも、後半途中から桐光学園へと傾いた。次第にディフェンスラインの裏を取られるようになると、後半33分、桐光の左サイドからの突破をファールで止めるのがやっとだった。

フリーキックで揺らされたゴールネット、ボールを拾い上げる大阪朝高の選手。しかし残り7分という時間は桐光学園の牙城を切り崩すには、短すぎた。初戦敗退という厳しい勝負の現実が突きつけられた。各都道府県を制したチームがしのぎを削る「全国大会」。大阪朝高の選手たちが想像していたよりも、1回戦の壁は高かった。

試合後にエースFWの趙栄志は、「このチームのみんなと一生懸命サッカーできたことは自分の財産になった」と大阪朝高での3年間を振り返った。この1年、冬の選手権予選前までは先が見えないくらいに、チームは低迷した。それでも全国大会の試合でボールを追う自分をイメージし続けたという。「後輩たちにも、不安になった時ほど、自分たちが全国の舞台で戦うシーンをイメージしながら練習してほしい。そうすれば、必ずここに戻ってこられると思う。昨年、そして今年叶えられなかった『国立』に行ってほしい」と後輩たちに夢を託した。

スタンドからも試合後、選手たちに惜しみない拍手とともに「胸を張れ」という声が鳴り止まなかった。神奈川県に住む千和子さん（44歳）は「試合には負けたが、全国の同胞に勇気と希望を与えたと思う。こうして日本の大会に出場し、グラウンドで試合をしているところを見ているだけでうれしい。来年もがんばってほしい」とエールを送った。

昨年もスターティングメンバーだった朴帝宣選手のオモニ・金順花さん（45歳）は「去年の選手権大会が終わったあと、息子に『オモニ、来年も必ず全国にいくから』と言われた。それから1年間、息子を見守りながら私自身も国立、優勝を夢見ていた。勝負の世界はきびしかった。たくさんの応援を送ってくれた同胞たちに感謝したい」と話した。

「伝説を伝統に」

「来年、絶対、ゼッタイに戻ってくる」。試合後のロッカールームを後にしながら、大阪朝高の康敏植監督は、言葉に力を込めた。その目に涙はなかった。

２００６年12月初旬、選手権進出を決めた同校を訪れた時、康監督ははっきりと「国立」という二文字を口にしていた。もちろん初戦の怖さも知っている。それでも上を目指せる自信があった。

春の新人戦、夏のインターハイの大阪府予選ではいずれもベスト8で敗退。康監督は、「きれいなサッカーをしようとしていた」という反省点から、大阪朝高のサッカーの原点である「泥臭さ」を部員たちに徹底した。自分たちのサッカーをすることが、2年連続で府下２２０校の頂点に上り詰めることにつながった。

「伝説を伝統に変える」。康監督がしきりに口にしたフレーズ。前回大会の全国ベスト8を「伝説」に終わらせずに、常に全国の舞台で戦えるチームに育て上げるという意味だ。康監督の言葉どおり、大阪朝高の名は全国区となった。大阪府内ではすでに追われる存在。その中で、チャレンジャー精神を失わず、自分たちのサッカーである「泥臭さ」を追い求め続けること――大阪朝高サッカーの伝統が進化する最大の要素は、そこにある。

大阪朝高サッカー部 康敏植監督のコメント

相手のＤＦがうまかった。いい場面もいくつかあったが、相手のＤＦにふせがれた。それでも前半は風下のなかでも主導権を握っていた。ハーフタイムで、選手たちにセットプレー、カウンターに気をつけ、1対1の局面を作られないようにと念を押した。しかし後半は相手にペースを握られ、得点はそんなかでのものだった。

1回戦はどことあたっても緊張するので選手たちにプレッシャーはあった。今回の試合で、全国で1勝をあげることの難しさを知った。しかし、大阪220校の頂点に立ち、2年連続で出場できたという伝統を作った。この伝統を引き継いで、来年も出場したい。

オモニへの思い、拳に託す

神戸朝高卒業生 裏在樹選手、世界へ挑戦

WBA世界フェザー級タイトルマッチが8月19日、神戸ファッションマート特設リング（神戸市）で行われ、同級6位の裏在樹選手（29・リングネーム＝武本在樹、千里馬神戸ジム所属）が同級チャンピオンのクリス・ジョン選手と対戦した。試合は9ラウンドTKOで在樹選手が負け、王者奪取はならなかった。

文・写真：尹蒼賢

「差はちょっとしかなかった。ただ、そのちょっとの差が9ラウンド続いた」（在樹選手）。

1ラウンドは在樹選手がペースを握った。しかし2ラウンド、相手選手の右フックをもらうと、在樹選手の腰はカクンと落ち、それからは劣勢な展開が続いた。

97年のデビューから10年が過ぎる。戦績は28戦21勝6敗1分。ねばって、やっとめぐってきた世界への挑戦。一方のクリス・ジョン選手（インドネシア）は、40戦無敗。これまで7度の防衛に成功し、今回が8度目の防衛戦となる。

ジョン選手の変則的な攻撃が続く。左フックや右アッパーが次々と在樹選手を襲う。そんななか、4ラウンドにはジョン選手のパンチで左まぶたが切れ、出血で左目の視界が鈍る。「それからは右のパンチが全然見えなくなった」と、試合後に在樹選手は話していた。

6ラウンドにはダウンを喫した。すぐに立ち上がると、ファイティングポーズを構え試合は続行。勢いづいたジョン選手に対し、ひるまず臨戦するが、8ラウンドには2回目のダウン。9ラウンド終了のゴングが鳴ると、ふらつきながら青コーナーに戻っていった。そしてインターバル。意識が薄れた在樹選手に、千里馬啓徳会長（千里馬神戸）が檄を飛ばす。

「今から逆転して、オモニに美味しい飯を食わしてやれ」

長男のオモニへの思い

オモニ・劉明美さん（53）は、4人の男兄弟を女手ひとつで育てた。昼と夜、掛け持ちで仕事をしては息子たちを全員、高校まで朝鮮学校に送った。仕事の合間に弁当をこしらえては、学校まで届けた日もあった。その、言葉にはとうてい置き換えられない「苦労」を、長男である在樹選手は10歳の頃から見て育った。

「世界チャンピオンになったら、オモニは楽になれるのかな」

オモニを楽にさせたい一心で、ジムの門をくぐったのは中学3年生のときである。神戸朝鮮高級学校在学時はボクシング部に所属、高校3年生の時には近畿大会で優勝、インターハイではベスト16という成績を残した。その経験は、「プロとしてやっていける」という自信につながった。

それから10年間のプロ生活。決して栄光に包まれた歳月ではなかった。01年には交通事故で首を痛め、その直後に行われた試合では判定負け、症状もさらに悪化した。首の痛みで夜も眠れず、引退を考えたという。05年の日本王座挑戦に失敗した試合では右眼窩底を骨折、失明寸前の重傷を負った。医者に、「もう、ボクシングは無理かもしれない」と告げられ、まさに絶望の淵に立たされたが、それでも最後まで望みは捨てなかった。腰骨からの移植手術を受け、手術は見事成功、現役復活を果たしたのである。

紆余曲折の10年間。それを支えた精神力は、他ならぬ「オモニへの思い」そのものだった。試合当日、オモニの姿は会場にはなかった。世界王者をかけた試合だったとしても殴られる息子を見たくないという思いが、オモニの胸にはあったのだろう。それでも在樹選手は、チャンピオンベルトを手に入れたら、真っ先にオモニに贈

4兄弟で挑んだ世界戦。写真左から、トレーナーとして支えた弘樹さん（25）、在樹選手、応援団長の一樹さん（28）、スパーリングパートナーの康樹さん（22）

在樹選手はこれまで右カウンターを武器に13のKO勝利を収めていた

ろうと思っていた。

9ラウンド終了後のインターバル、千里馬会長の励ましの言葉を、薄れていく意識のなかで聞いていた在樹選手は、ぼそっとつぶやいたという。「オモニ…」。

10ラウンドのゴングが鳴った直後、在樹選手サイドが、これ以上試合を進めるのは危険と判断した。9ラウンドTKO。オモニにベルトを贈ることはできなかった。

世界への道、これからも

試合後、控え室には報道関係者に囲まれた在樹選手の姿があった。「ぼくが情けないから試合を止めたんでしょう」などと、在樹選手は報道陣の質問に答えていた。そんななか、「今後はどうしますか?」との質問があった。

「もう一回、がんばろうって気にはなれない」。そう俯いていた。

千里馬会長は、「相手は強くも弱くもない。ただ、ちょっとの差があり、それが続いて勝敗が決まった。今後のことは、これから話していくつもりでいる」と、静かに話していた。

※　※

試合から10日間近くが過ぎた頃、在樹選手の再起戦が決まったとの発表があった。具体的な詳細はまだ決まっていないというが、「引退」ではなく「再起」であることは間違いないという。

それについて在樹選手は、「引退はしない。引退を考えていないプロボクサーは全員、チャンピオンベルトをねらっていると思う」と、こともなげに話す。「いろいろ考えたけど、ボクシングは辞めない。それに、オモニにもまだベルトを見せていない」。

年齢的に残された時間は長くはない。現在の予定では、試合は11月23日に行われるという。「『世界』を必ず獲るから、それまで見ていてほしい」。9月に29歳になった男の固い決意である。

大阪朝高ラグビー部
三たび花園へ

多彩な攻撃で「全国一」を目指す

오사까조고 투구부

ラグビー部・呉英吉監督に聞く

07年11月11日に行われた全国高等学校ラグビーフットボール大会大阪府予選第2地区決勝（近鉄花園ラグビー場）で、大阪朝鮮高級学校ラグビー部が都島工業高を29対24で破り、3年ぶり3回目の「全国大会」出場を決めた。12月27日から1月7日まで行われる全国大会（近鉄花園ラグビー場）を前に、ラグビー部の呉英吉監督（39歳）に話を聞いた。

文：琴基徹／写真：琴基徹・盧琴順（朝鮮新報記者）

大阪府予選第2地区決勝、都島工業高との試合。トライを目指し突進する大阪朝高選手たち。ボールを持っているのは12番・高健二選手（3年）

――07年春から監督に就任しましたが、どのようなチーム作りをしてきたのでしょうか？

チームの主力である2、3年生は、前任の金信男監督が育てた選手たちです。そういう意味ではこれまでのチーム作りを継承していったと言えます。就任してすぐ、5月に大阪総体が始まったこともあり、あまり考える暇もなく駆けてきたという感じです。大阪総体は3年生主体のチーム編成でしたが、幸いブロックで優勝することができ、今回の予選のAシードを獲得することができました。Aシード獲得が全国大会出場につながる非常に大きな意味をもつものでした。

7、8月と3年生のなかで何人も負傷者が出たこともあり、2年生が台頭してきました。メンバーを何度も変えることにより、チーム内での競争が激しくなり、3年生を越えようという2年生の意欲が高まったことは、チーム全体にとっていい刺激となりました。

例年にない猛暑のなかスタミナ作りに励み、フォワード、バックスともに基本

練習を繰り返しました。すぐに結果を得ようとするのではなく土台作りを徹底し、新しいことに挑戦し習得するよりも、選手一人ひとりが自分の長所を伸ばし自分のすべきことをきちんとできるようにしました。そうした結果、10月には私自身が確信の持てるチームに仕上がったと思います。同時に負傷していたメンバーも復帰し、良い形で予選に入ることができました。

――現在のチームの特長はなんでしょうか？

攻撃のバリエーションが豊富だということでしょうか。いろんな形で点数を取ることができます。フォワード、バックスからの攻撃、そしてモール、キックも左右から蹴れます。ですから決勝戦は残り5分で逆転されましたが、再逆転できると思っていました。相手ゴールラインの直前までボールを持っていけば100パーセント得点できるという自信がありました。

チームの特長としてはまた、個性的な選手、タレントのある選手が多く、この分野では負けないというものを一人ひとりが持っています。中心選手として挙げられるのは次の5人で全員3年生です。1番の張和裕選手、スクラムが強く状況判断に優れています。フォワードですがトライ数が多い。3番の金弘泰選手は105キロの巨漢でフォワードの要です。8番は主将を務める趙顕大選手、ナンバーエイトとして攻撃と守りの起点となる選手です。12番の高健二選手はパス、キック、ランで秀でていて高校トップクラスの選手です。13番の金翔太選手は対人において強さをもっていてチームのためのプレイを常に心がけている選手です。15番の李一貴選手はフットワークが良く相手のフォワードの間を抜いていくのが得意。瞬間的な判断力に優れています。

目標は優勝、「全国一」

――全国大会に向けての抱負をお聞かせください。

もちろん目標は優勝、「全国一」です。最低でもベスト8には残りたいと思っています。2004年にベスト16まで進みましたから。

今は予選で痛めた身体を整備し、さらにパワーアップするようにしています。引き続きチーム内競争を高めていきたい。予選でレギュラーだったからといって全国大会でレギュラーになれるとは限りません。全国大会の試合の中でもチームを成長させようと思っています。

予選の決勝での教訓として、相手に合わせたラグビーをすればペースを乱すということがありました。自分たちのラグビーをしなければいけません。大阪朝高のラグビーは魂のラグビーです。ボールを持ったら1メートルでも前に進む。タックルは足へ、つかんだら離さない。そういった気持ちの入ったラグビーを全国の舞台でも見せたいと思っています。

勢ぞろいしたラグビー部員たち。全国大会へ向けワンランクアップを目指す

【大阪朝高のラグビーを全国大会で】

趙顕大 主将

予選では応援に来てくれた同胞から大きな力を得ることができました。今のチームは団結力が自慢です。技術面ではまだまだ未完成ですが、あと1ヵ月で全国で戦えるチームにならなければいけないし、全国大会で一試合一試合を勝つことで力をつけていけると思います。主将として積極的に動くことでチームも動かしていきたい。先輩たちの伝統を受け継ぎ、大阪朝高のラグビーができればと思います。そうすることで、少しでも日本全国の同胞の力になれればうれしいです。

● 第87回全国高校ラグビー大会
－大阪朝高vs新潟工業高の試合－
日時：12/27(木)13時15分開始
場所：近鉄花園ラグビー場第1グラウンド(近鉄奈良線東花園駅下車)

第87回全国高等学校ラグビー大会

大阪朝高ラグビー部

花園で3度目の挑戦

東大阪市の近鉄花園ラグビー場で昨年12月27日に開幕した第87回全国高等学校ラグビー大会に、大阪朝鮮高級学校が大阪府第2地区代表として3年ぶり3度目の出場を果たした。3年前のベスト16を越えることが期待されたが、シード校の壁は厚く3回戦で涙をのんだ。それでも「全国大会」ベスト16に輝いた大阪朝高。今後の課題が明確になった有意義な大会だった。

文・写真：琴基徹

厚かったシード校の壁

1回戦 VS 新潟工業高（新潟県代表）

19—14
前半14—7／後半5—7

「新しい歴史を作るのはお前たち」と試合前、選手たちに激を飛ばした呉英吉監督。しかし、新潟工業との1回戦（12月27日）は3年前と同じようにヒヤヒヤさせるものだった。試合は、開始早々大阪朝高がトライを決めるが、トライをとるととられて追いつかれるという展開。リードこそ奪われなかったが、大阪朝高は多くの時間を自陣でのディフェンスに費やす苦しい内容だった。

試合を決めたのは、前半と後半の終了間際に見せた同じパターンの攻撃だった。フォワードがゴール前左でボールをキープし相手ディフェンスを充分にひきつけた後、大きく右へ展開し、バックスがボールを回し、最後はともに15番のフルバック李一貴（3年）が華麗なステップで敵ディフェンスをかわしてトライを決めた。また、受けにまわりながらもしのぎきったディフェンス、60分間走り通したスタミナも光った。

終了後、呉監督は「ミスが多かった。攻撃、守備がバラバラで選手同士の確認、意思統一ができていなかった。次の試合までに修正したい」と反省していた。

前半30分、トライする李一貴。この試合、李は終了間際にも決勝3点となるトライをあげる大活躍だった

観客席には、大阪朝高の生徒、教員をはじめ、大阪や各地から多くの同胞、日本人がかけつけ熱い声援を送っていた

敵のタックルをかわす金翔太（3年、写真上）、モールは大阪朝高の得意の攻撃パターン（写真中）、勝利の後に25人で記念撮影（写真下）

2回戦は八幡工業戦（30日）。2日間の練習で1回戦の反省点を修正したと言う呉監督。強い風が吹いたこの日は、風対策も試合を決める大きな要素となった。

監督の言葉通り、この日の大阪朝高は1回戦とは別チームのような動きを見せ相手を圧倒した。前半、風上に立った大阪朝高は、キックを有効に利用し陣地を稼ぎ、相手ゴール前にボールを持っていくと、フォワードのモールからゴールに飛び込む攻撃で2トライをあげる。後半、風下に立つと一転してボールをキープしながら着実に前に進むラグビーを展開。バックス、フォワードの多彩な攻撃で点差を広げる一方、相手の反撃を1トライに抑える堅い守りで快勝した。強風の中、13番金翔太（3年）の確実なゴールキックも光った。

今大会、大阪朝高のサポートについていた金信男前監督（中大阪朝鮮初級学校校長）は、「強風対策など監督が明確なゲームプランを立て、選手たちがそれを良く理解し実践できていた」と振り返った。呉監督は、3回戦への抱負を聞かれ、「シード校の壁を越えるのではなくぶち破りたい」と語っていた。

2回戦

VS 八幡工業高（滋賀県代表）

27—7
前半12—0／後半15—7

試合前、円陣を組んで気合を入れる選手たち

風下に立った後半だったが、4分、金志昇（3年）が左中間へトライ。相手を突き放す有効なトライだった

2回戦は攻守ともに大阪朝高が相手を上回った

敵選手を引きずりながらゴールへ突進する趙顕大（3年、キャプテン）

体力で勝る東福岡相手に大阪朝高のフォワードは体をはって攻撃をしかける

3回戦

VS 東福岡高（福岡県代表）

7—80
前半7—40／後半0—40

戦いを見つめる呉英吉監督（右）と金信男前監督

腰を落として攻撃のポイントを作る張和裕（3年）。相手のタックルを果敢に受けて立つ

08年1月1日、元旦に行われたこの試合、相手の東福岡高校は今大会のAシード校の強豪である。結果から言えば、試合は7対80で大阪朝高の大敗だった。

試合前、呉監督は「個々の能力は相手が上。相手のバックスを自由にさせないようにし、相手が球を出した時にプレッシャーをかけなければいけない」と語っていた。東福岡の攻撃を一発目のタックルで止められるのかどうかに注目していたが、大阪朝高の果敢なタックルも体力で勝る東福岡の攻撃を止めることができなかった。大阪朝高に勝った東福岡は今大会の優勝に輝いた。

それでも前半23分、大阪朝高は相手陣前左中間、ラックで攻め込んだ後、右サイドで6番の白哲和（3年）から8番の趙顕大（3年、キャプテン）へとつなぎ趙がそのままゴールになだれ込んで意地のトライを決めた。意外なほど点差が開いたが、大阪朝高が消極的にならず、果敢に攻撃をしかけた結果だとも言える。

試合後、泣きじゃくる選手たちに呉監督は、「なぜ泣く。後悔のない試合ができたのか？　結果をしっかりと受け止めろ。何が足りないのか、それをどう乗り越えるのか。もっと進化させ、この借りを絶対に返そう！」と激を飛ばした。卒業する3年生たちは「もっと良いチームを作って、来年も全国の舞台に立ってほしい」と1、2年生に夢を託していた。

プライドをかけた朝大サッカー部の戦い

関東リーグ前期の戦いを追う

文・写真：鄭茂憲

朝鮮大学校サッカー部に、大学サッカーのトップである関東リーグ出場への門戸が開かれて7年。都リーグを勝ち抜き関東2部に上り詰めた今年、強豪大学との戦いの中で、彼らは何を感じ取ったのだろうか。

不安と「誤算」

関東大学サッカーリーグ2部の2008年シーズンの開幕を前に、朝鮮大学校サッカー部に不安が襲い掛かる。4枚のディフェンスラインのうち、3人が負傷。そのうちの一人は、チームの精神的支柱ともいえる主将の孫民哲（体育学部4年）だ。監督の崔勇海（42歳）に焦りがにじむ。新参者の朝大にとって、ベストメンバーで臨みたい気持ちは、どの大学よりも強かったはず。崔の苦渋をよそに開幕は待ったなしに訪れた。

初戦（4月6日）は、昨年1部の青山学院大学。「格上」とも言える相手に、朝大はディフェンシブな布陣で臨む。シュート数で青学9本に対し朝大4本と攻め込まれたものの、結果は1対1のドロー。スタートとしては満足のいくものだった。

しかしその戦術が第2節で早くもあだとなる。東海大学（昨年1部）戦、自分たちのミスから失点が重なり、0対5の完敗。点差ほどの実力差はなかっただけに、リーグ戦で「5点」の得失点差のビハインドは、大きくのしかかる。

「高い授業料となってしまったが、いい経験になった。自分たちと、関東リーグでシーズンを過ごした大学の間に差があると思っていたから、ディフェンシブで試合に臨んだが、間違いだったと考えている」と、崔は非を認める。選手たちだけでなく崔にとっても、関東リーグは初の挑戦だ。手探りで戦い

朝大にとって前期シーズンは我慢の時期となった。90分間の「ハードワーク」をいかに維持できるかが、後期を勝ち抜くポイントになる

に臨んでいるといっても過言ではない。

しかし崔にはうれしい誤算もあった。不安要素だった、選手の層についてだ。

関東リーグは、1部、2部それぞれ12チームが総当りで戦うリーグ戦で、前期、後期に分かれて、全22試合をこなすハードなスケジュールが組まれている（1部下位と2部上位の2チームずつ、また2部下位2チームは関東大学サッカー大会1、2位と入れ替え）。前年までの東京都1部は、全9試合。つまり倍以上を、それも強豪たちと戦い抜かなければならない。その中でケガやアクシデントからチームレベルをトップで維持し続けることは容易ではない。それだけに選手層の厚みが長いシーズンを勝ち抜くための大切な要素になる。

関東リーグに所属するチームは、高校時代に選手権やインターハイ、またユースチームで全国大会を経験した者がほとんどを占める。質、量ともに、入部してくる選手たちが、朝大とは比べものにならない。選手たちの実力ではなく、その経験値において、全体層のレベルが違うのだ。

しかし、それまで控えに甘んじてきた選手たちのポテンシャルは、崔が思うよりもはるかに高かった。「（高いレベルの）土壌が、選手を成長させるんだと改めて感じた」と崔が話すように、選手たち自身もそう皮膚で感じている。エースフォワードの金成勇（体育学部4年）は、「リーグ戦はベストメンバーで戦い続けられるものではありません。ベストでないメンバーでいかに勝てるか」と冷静な状況分析を口にしつつも、上位に食い込める自信を、試合の中で感じ取ったと話す。主将の孫も、ベンチから見つめる中で「惜しい試合の連続。力を出し切れば勝てる試合が多かった」と振り返る。

それでも、結果は思い通りにはついてこない。前期を終えた現在、3勝4敗4分の7位。ディフェンダーの安泰成（外国語学部3年）の言葉が、朝大の前期シーズンの状況を言い当てている。「思ったよりも（自分たちの力が）通じた。でも、勝ちきれない」。

プレスがカギ

朝大サッカーは3つの柱をもとに、ゲームプランを立てる。3P（スリー）コンセプトと呼ばれるそれは、「プライド（自負心）」「プレス（圧力）」「プライオリティ（優先権）」だ。朝鮮人としてプライドを持ち、早い位置からのプレッシングフットボールを展開するとともに、優先順位、つまりリスクの少ない効果的な攻撃をする、ということだ。

崔は、朝大サッカーの長所短所を示すのに、2つの試合を例に挙げた。

第4節の拓殖大学戦。昨シーズンリーグ3位の同大相手に0対0で引き分けた試合だ。4月19日、さいたまスタジアム（さいたま市）のサブグラウンドで行われたこの試合、断続的に降り続ける雨と強風が吹き荒れる中で行われた。拓殖大にしてみれば、朝大は「勝ちを取りにいく」相手だったのだろう。

エースの金（写真右・白）が朝大に入学した理由は、「朝鮮人としてのプライドをかけて戦いたかったから」だと話す（赤＝日体大、オレンジ＝拓殖大）

悪天候が朝大に味方したのも事実。しかし試合終了まで落ちない朝大のスタミナが、拓殖大の思惑を崩した。前線からの早いプレスを終始展開できる強みは、時に「うまいサッカー」以上の脅威になる。試合後、グラウンドに倒れ込んで悔しがっていた拓殖大選手の姿が、それを象徴していた。

一方、短所がモロに表れたのが、第8節（5月11日）の日体大戦だ。朝大グラウンドで行われたこの試合、朝大は開始から早いプレスでゲームを掌握すると、前半10分にゴールを奪う。勢いそのままにゲームを決めるかと思われたが、徐々に朝大選手の足が止まりはじめる。中盤で細かなミスを連発し流れをつかまれ、後半6分に手痛い同点弾を決められる。「相手（の力）に合わせる戦いをしてしまうことが、大きな問題点。90分間、自分たちのサッカーを貫かなければ、勝てる試合も勝てない」と崔は、悔しさをにじませた。選手が同じ意識のもと、前線から激しいプレスをかけて、時間とスペースを相手に与えないサッカー。それを維持し続けることが、リーグを勝ち抜くための至上命題となる。それにはスタミナと精神力が求められる。

ベースの70パーセントはできつつあると崔は話す。勝つための残り30パーセントは、不可能の積み重ねではない。

彼らのプライド

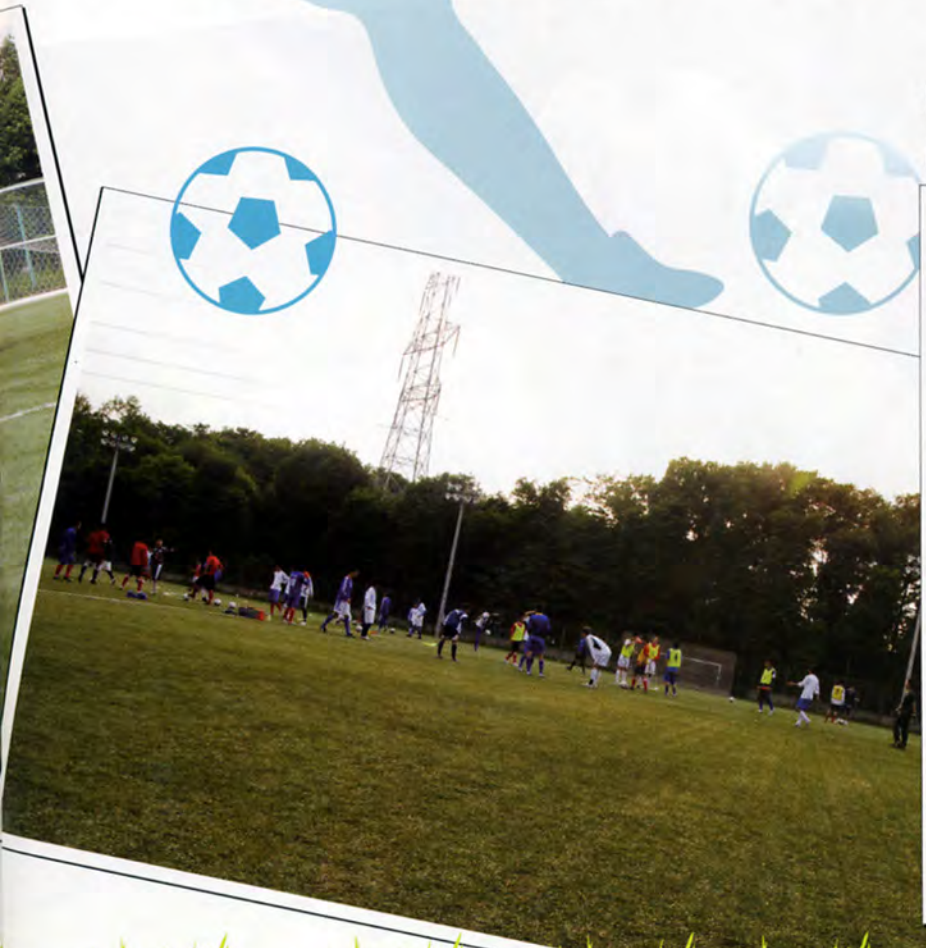
朝大サッカー部に、関東リーグ、総理大臣杯全日本大学トーナメントなどの大学サッカーの頂点を目指す戦いへの挑戦権が与えられたのは2001年だった。それまで大学サッカー連盟は、日本サッカー協会の規定により「準加盟」となる外国籍選手登録が6人以上の朝大に、関東リーグおよび同リーグ昇格につながる都リーグ1部への参加を認めていなかった。門戸開放は、朝大や同胞スポーツ関係者、そして選手たちの長年に渡る地道な努力の結果だった。

2003年、関東リーグ進出を目指す朝大サッカー部に一つの転機が訪れる。サッカー部強化の一環として、朝大にサッカー特設班が設置されたのだ。全寮制の朝大のよさをフルに生かすためのプログラムだった。

70人の部員中、特設班は20人。彼らは各々の学部で講義を受けながら、寮生活を特設班のメンバーで過ごす。いい意味での「特殊意識」が植え付けられ、よりサッカーに専念することができるという。事実、朝大卒の鄭大世（川崎フロンターレ、朝鮮民主主義人民共和国代表）も、特設班で意識の高い仲間と切磋琢磨したことが、Jリーグでも戦える自分を作りだしたと述懐している。

1日4回の食事を取るなどのフィジカル面だけでなく、「on the pitch off the pitch（ピッチの上でも外でも）」で、メンバーが生活をともにすることで、互いを刺激し合い、より強い意識の共有をはかれるようになったという。

そして、彼らが関東リーグまで上り



監督の崔（写真）はいつもボクシングに例えながら、話をするという。「ジャブだけでは相手を倒せないし、ストレートだけも勝てない。その配合が重要だ」と。試合は常に、駆け引きの連続だ

アクシデント乗り越えチョモランマ登頂！

世界の頂上に統一旗を掲げる

在日同胞登山家の鄭義哲さん（36）が5月23日、世界最高峰のチョモランマ（8848メートル）の登頂に成功した。鄭さんは7大陸最高峰すべてに登頂するセブン・サミットを目指していたが、今回のチョモランマ登頂でセブン・サミットを達成。海外同胞としては初めての快挙となる。
鄭さんにチョモランマ登頂記を書いてもらった。

【登山家】鄭義哲

南の登山隊とともに

05年1月に登山を初めて、2年間でアフリカ、南米、北米、欧州、オーストラリア、南極の最高峰6山を征服した。セブン・サミット達成まで残るは世界最高峰のチョモランマだけ。しかし、山のことを知れば知るほど、チョモランマに登ることのたいへんさがわかってきた。これまでほとんど単独で登ってきたが、チョモランマはそういうわけにはいかない。また多額の資金もかかる。もう登れないのではないかという思いをもつこともあった。

しかし今年1月、在日本朝鮮登山協会の金載英会長の尽力により、韓国京畿道の登山隊の一員としてチョモランマ登頂に挑戦することができた。登山隊は1年も前から準備をしているので、急に日本から参加することが迷惑にならないかと思ったが、登山隊は「同じ民族だから」と快く受け入れてくれた。

3月27日に成田を出発。ネパールのカトマンズで登山隊と合流した。登山隊は私を含めて18人。標高5350メートルのベースキャンプに到着したのは4月10日だった。チョモランマにアタックするには、ベースキャンプを拠点にしながら、キャンプ1（6040メートル）、キャンプ2（6360メートル）、キャンプ3（7100メートル）、キャンプ4（7905メートル）と4つのキャンプを設営する必要がある。

大変だったのがベースキャンプからキャンプ1に荷物を引上げる作業だった。隊全体の荷物を運ぶので10回以上往復しなければならない。キャンプ1までの道程はアイスフォールと呼ばれ最も事故の多いところで、毎年死者が出ている。3～4階建てのビルほどもある氷の塊がごろごろしており、それがいつ崩れてくるかわからない。実際にしょっちゅう雪崩があった。ベースキャンプとキャンプ1、そしてキャンプ2と往復しながら高度に身体を慣らしていった。

今年は北京五輪の聖火がチョモランマを越えるということで、チベット側からの登頂は禁止され、ネパール側も5月1日から10日までキャンプ3、キャンプ4を設営できないようになっていた。キャンプ3に初めて到着したのが5月13日だった。

7500m地点、1200m続く壁の途中。キャンプ4を目指す

たった一人での登頂

今回、南東嶺ルートという最も一般的なルートを選んだ。そのルートにはベースキャンプから頂上までロープがつながっており、登山者はロープに金具をつけて安全を確保しながら登っていく。6700メートル付近から1200メートルにわたり平均斜度40度の壁が続く。非常にキツイ道程だ。一歩ずつ確実にロープを金具で捕らえて登っていくのだが、単純作業のくり返しと酸素が平地の半分以下のため頭がボーッする。

キャンプ3に到着した後ベースキャンプまで一旦戻り、休みをとった後頂上へのアタックを開始した。5月19日にベースキャンプを出発。キャンプ2で19、20日を過ごし、21日にキャンプ3到着。2時間ほどしか眠れないなか、22日朝6時にアタックの準備を整えて出発した。私を含め隊員5人とシェルパ5人の計10人でのアタックである。

頂上で。一人だったので至近距離からしか撮影できなかった

22日15時30分にキャンプ4に到着。酸素を吸いながらじっと休む。20時30分、頂上へのアタックを開始した。

振り返ってみると、いくつかのアクシデントといくつかの幸運があった。隊員もシェルパも疲れていて、シェルパの一人はアタックを断念。8600m地点で私のシェルパも、突然私の酸素、手袋が入ったザックを置き自分のペースで勝手に進んでそのまま下山してしまった。そのため山頂にはたった一人で登る羽目になった。軍手一つで登ることとなったが、幸運の一つは気温がさほど下がらなかったので、凍傷にならずにすんだことだ。

予備の酸素がなかったので、通常1時間に3リットルの酸素を吸いながら登るのに、私は半分の1・5リットルの酸素で登ることにした。これが非常にきつかった。他の隊員たちのスピードについていけず、私はどんどん遅れていく。私はただただ「まだか、まだか」とだけ思いながら登り続けた。第2の幸運は、頂上へ行って折り返してきた隊員に8830メートル地点で出会い、酸素ボンベを新しいものと取り替えてもらえたことである。

23日10時50分（日本時間14時5分）、ついに頂上に到着。たった一人の登頂だった。しかし、喜びよりも、「長かった」「やっと着いた」という思いが強かった。当初、頂上には状況が悪ければ5分、良くても15分だけいて引き返すつもりだった。統一旗を広げセルフタイマーで写真を撮ろうと思ってもなかなかうまくいかず、3回失敗しあきらめる。そうこうしているうちに気がつけば40分が経っていた。これも振り返ってみると非常に危険なことだった。下山途中、死体も目にした。それでもキャンプ4に16時ごろに無事に到着。往復19時間の行程だった。

まったくの素人から登山を始め、セブン・サミットという無謀とも思える目標を立てた。3年3ヵ月で達成できたのは、運が良かったと言うしかない。そしてあっという間の、ものすごく充実した3年3ヵ月であった。夢は大きく持つこと、何事も最後まであきらめないこと…山を通していろんなことを学んだ期間だった。いまは、もう少し山と付き合っていきたいと思っている。

①登山協会の金載英会長（左）がベースキャンプまで激励に来てくれた　②下山時チョモランマが見えるベースキャンプ前の丘で統一旗を広げ記念撮影　③キャンプ1に向かう途中のアイスフォール地帯　④アイスフォールにて梯子を渡る　⑤山頂で登山協会の旗を広げる　⑥ベースキャンプ手前のゴラッセップ（5200m）にて

プロフィール
鄭義哲　チョン・ウィチョル
36歳、東京都在住。2005年1月から登山を始める。始めた当初から世界7大陸の最高峰（セブン・サミット）登頂を目標にする。これまでに、キリマンジャロ（アフリカ）、アコンカグア（南米）、マッキンリー（北米）、エルスブール（欧州）、コジウスコ（オーストラリア）、ビンソンマシフ（南極）、チョモランマ（アジア）のセブン・サミット、日本の百名山などを登頂。仕事はカフェ経営。